

ゆう いち はたけ 友一と畑

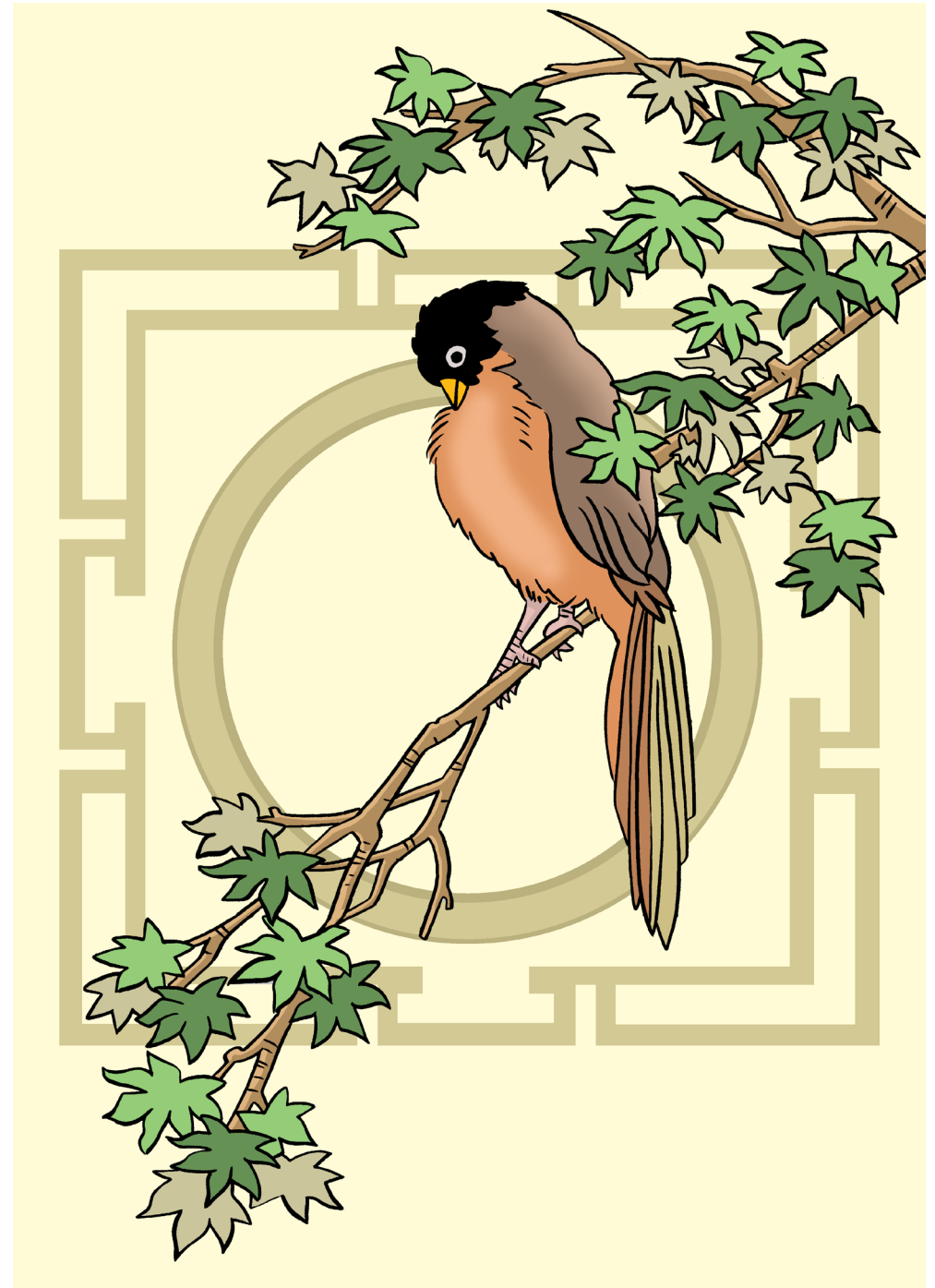
「うわあ、すごいで！」 まだ ^{そだ} 育ち始めたばかりの ^{あか} 明るい ^{いろ} オレンジ色の カボチャを
ポンポンと たたきながら、友一が ^い 言いました。昨夜から、もう ^{ふた} 二回りほども ^{おお} 大きくなって
いるようです。「おまえも、^{にい} 兄ちゃんカボチャ ^{たち} 達みたいに ^{おお} 大きな カボチャに ^い になれるよ。」

お母さんが ^{つく} 作ってくれる ^{いろいろ} いろいろな カボチャ料理を ^{おも} 思うかべて、友一は ^{ゆういち} にっこりと
ほほえみました。カボチャの ^{あま} 甘辛煮、カボチャの ^{てん} 天ぷら、カボチャの ^{はい} 入った ^{しるもの} 汁物……。
友一は、カボチャが ^{だい} 大好きです！

友一は ^{ゆういち} そこに ^た 立って、^け のびを ^さ しました。今朝は ^{しあわ} とても ^き 幸せな ^{ぶん} 気分です。畑では、
たくさんの ^{やさい} 野菜が ^{そだ} よく ^ま 育っていました。真っ赤な ^か トマト、青々と ^{あお} しげった ^{そう} ほうれん草、
カボチャ、サツマイモ、ナス、ジャガイモ、それに ^{にんじん} にんじん……。みんな、友一が
お父さんを ^{とう} 手伝って、^{てつだ} いっしょに ^う 植えた ^{やさい} 野菜ばかりです。畑の ^{すみ} すみには ^{うつく} 美しい ^{うめ} 梅の ^き 木が
立っていて、みきは ^お 生いじけた ^は 葉の ^{くろ} かげで ^み 黒く ^せ 見えます。背の ^{ひく} 低い ^{かき} 柿の ^き 木には、
小さな ^{ちい} 柿の ^{かき} 実が ^み つき ^{はじ} 始めていました。うれて ^た 食べられるように ^{なる} には、まだ ^{だい} だいぶ
時間 ^{じかん} が ^か かるでしょう。

畑を ^み 見回してみると、ナスの ^{まわ} 周りに ^{ざっそう} 雑草が ^は 生え ^{はじ} 始めています。「雑草は、^{ざっそう} 小さいうちに
ぬいておかないと。」 友一は、お父さんが ^{ざっそう} 雑草について ^い いつも ^{きょうくん} 言っていた ^{かえ} 教訓を ^{くり} くり返
しました。「雑草は、^{ざっそう} そのまま ^{ほお} 放っておくと、^{やさい} 野菜が ^{おお} 大きく ^{えいよう} 栄養 ^{そだ} たっぷりに ^{ひつよう} 育つのに ^{ひつよう} 必要な
養分を、^{ようぶん} 土から ^{つち} うばってしまうから！」

友一は、畑の ^{やさい} 野菜を ^せ 世話 ^わ するのが ^{たの} 楽しみ ^{やさい} でした。野菜の ^{たね} 種は、^{みず} いったん ^{みず} 水を ^{たっぷり} たっぷり
吸った ^じ 地面 ^{なか} の中に ^{おも} もぐりこんだか ^{おも} と思うと、やがて ^め 芽が ^{つち} 土を ^あ おし ^{かお} 上げて ^だ 顔 ^だ を ^だ 出します。
そんな ^{ようす} 様子 ^み を ^{ゆういち} 見るのが、友一は ^{だい} 大好き ^す でした。畑仕事 ^{はたけしごと} の中でも、友一が ^{なか} 特に ^{ゆういち} 好きなのは、
収穫 ^{しゅうかく} です。家族総出で ^か トマトを ^{そくそう} もぎ、野菜を ^{やさい} 取り ^い 入れて、大きな ^{おお} かごに ^{あつ} 集めるのです。
ジャガイモは、^ほ くわで ^お 掘り ^ほ 起こします。それは ^{たからさが} まるで ^{たからさが} 宝探 ^{ゆういち} し ^{おも} のようだと、友一は ^{おも} 思います。
地面 ^{じめん} の下 ^{した} で ^{そだ} 育った ^{ひと} ジャガイモを、^{のこ} 一つ ^み 残 ^だ らず ^み 見つけ ^み 出さ ^だ なくては ^{なら} ないから ^{です} です。



腰をかがめてナスの周りに生えてきた
雑草をぬき始めると、だれかが友一を
呼ぶ声がします。目をあげると、友だちの
拓が木刀をかざしながら、こちらへ
走って来ます。拓は、侍の子です。

「見て！」興奮した声で拓がさけび
ました。「わしの刀なんだ！」

友一は、拓の新しいおもちゃを
しげしげと見つめました。「すげえなあ！
わしにも、そんなのがあったらいい
なあ。」

拓は笑って、うれしそうに飛びはね
ました。「そうじゃろう、そうじゃろう！
なあ、いっしょに遊ぼうや。」

友一は、今まで草取りをしていた
ナスの畑をふり返りました。ナスは
もはや、ついさっきまでのように興味
深くは見えません。「最初にこれ
を終わらせにやいけないんだ。ちゃんと
世話せんと、ナスが苦しむからね。」

拓は敵と戦っているふりをして、
木刀をふり回し始めました。「そんな
こと、だれにもわからんよ。それに、一
体どうしてそんなことしてるの？ おまえの
母さんにだって、簡単にできるだろ。」

「わしは、畑仕事が好きなんじゃ。」と
友一が答えました。でも、どのくらい
好きなのか、自分でもだんだんと
気持ちぐらぎ始めました。



「だが、本当に今、畑仕事をしたい気分なんか？」

「ああ・・・そうだと思っとたんやけど・・・。やっぱり今は、遊びたい気分や。もう少ししたら、また畑仕事を
する気分になるだろう。そうしたら、その時に雑草を始末するわ。」

友一と拓は、村の近くの川の浅いところで、日中の大半を過ごしました。松の丘に登って両うでを広げ、空高くまい上がる
タカのまねをして遊びました。そでの中には、拾い集めたピカピカの石をいっぱい入れて、戦のまねごとをして遊びました。
木刀を持っていたのは拓だけだったので、毎回戦ごっこに勝つのは、拓でした。

「今日は、どうだったかい？」 シャケと たくわんと ご飯と みそ汁の 夕食を 囲みながら、お父さんが たずねました。

「拓と 遊んだよ。」 そう 答えながら、友一は 急に、それが 丸1日を 過ごす 最善の 方法では なかったのではないかと 感じ始めました。

「楽しかったか。」 みそ汁を すすりながら、お父さんが 言いました。「恵まれた すばらしい 夏の 日々は、本当に 大切だからのう。」

しばらくすると、お父さんが 気がかりそうに 言いました。「今日、ナスの 畑に 雑草が 生えておったが。おまえは ふだんから 十分 気い使って、雑草が 生えないように 見てくれとるが、今日は 気い つかんかった ようだね。」

「父さん。雑草は 見たんだけど、今朝は 畑仕事を する 気分で なくて。」と 友一が 答えました。

「おまえは 去年、母さんを 実によく 手伝ってくれた。それで、今年はおまえに 畑を 任せることに したんじや。畑のおかげで、わしらは 漬物やら 梅干しやら 干し柿を、冬の 間でも 食べることが できるんじやぞ。」

「分かってるよ。」 友一は 弱々しい 声で 言いました。

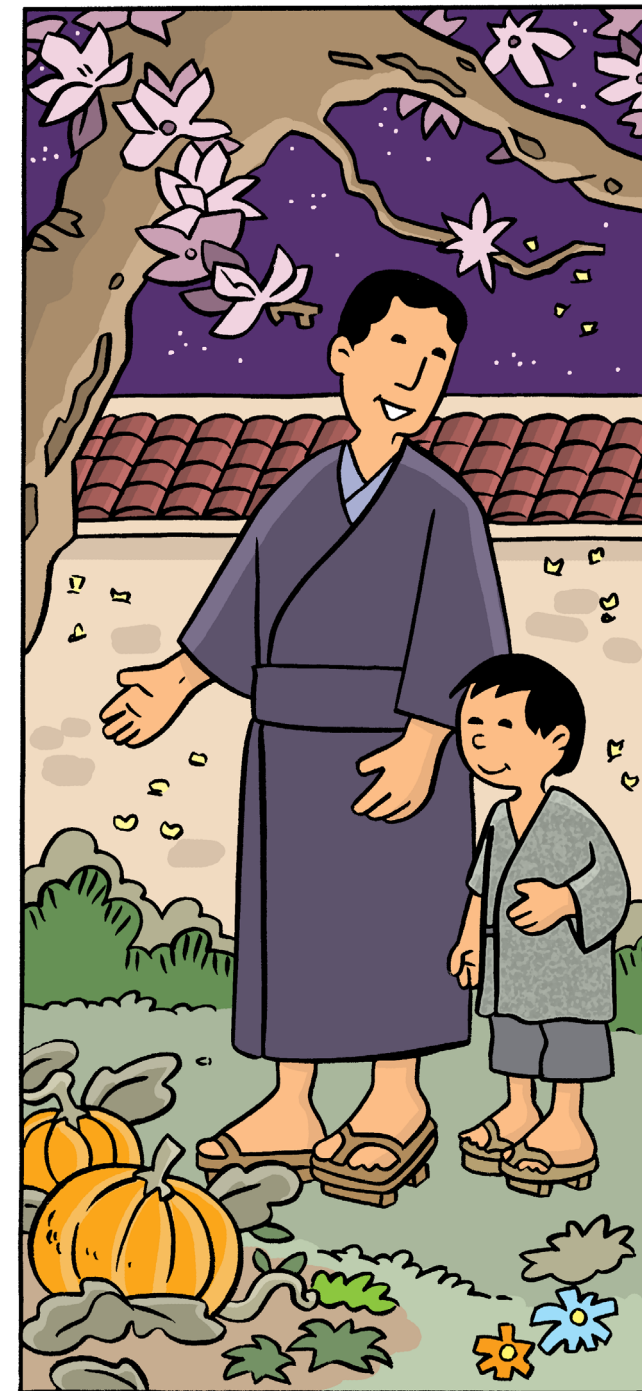
お父さんは、友一の 肩に 腕を 回しました。お父さんの 目は 輝いています。「飯が すんだら、おまえに 見せてえ もんがある。」

その夜、友一とお父さんは 畑の すみに 立ちました。周りでは ホタルが ピカピカ 光り、その他の 虫たちも 飛び交っています。

「これは 何だか 思うか？」 そう 言いながら、お父さんは 浴衣の そでから、色が うすくて 平べったい 種を 一つ 出して、友一の 手に にぎらせました。

「カボチャの 種。いつか、これは カボチャに なるんだね。」と 友一が 答えました。

「本当か？ じゃあ、この 種を この 地面に 置いておけば、5か月後に もどってきた 時に、ここに カボチャが あるって ことだな？」



「いいや、父さん。もし このまま ここに 置いていたら、鳥に 食われるか、
風で どころかに 吹き飛ばされて しまうよ。ちゃんと 植えないとね。」

「では、ここに 植えれば、その後は そのままに しておいて いいんだね？」

友一は 笑って 言いました。「もちろん、だめさ！ 種には 水をやらないと
いけんし、肥料も 必要だもの。それに、虫が 来て 葉っぱを 食わないように
しないと いけんし、雑草も 生えないように しないと いけないからね。」

「そうかあ、大変な 仕事だなあ！」 お父さんが ほほえみながら 言
いました。「じゃあ、来年は カボチャの 種 植えるのは、やめに しまか？」

「カボチャの 種を 植えないの？」 友一が 声高に 聞き返しました。

「それから、ナスの 種も、トマトの 種も。種は 何も 植えないこと
にするんじゃ！ 世話するのが 大変だろ？ おまえには 楽しんで もらいたい
からのう。」

「だけど、冬の 間は 何 食べるの？」

「そうだなあ。そのころに 野菜を 植えるかのう？」

「それじゃあ、間に 合はんよ！ おてんとさんが 十分に 照らんし、
何を 育てるにも 寒すぎるもの。」

「だが、おまえは 畑を やるより、野原で 拓と 遊んでいたいと
おも 思わんのかい？」

友一は だまって しまいました。その日、ただ 遊びたがってばかり
いたら どうなって しまうのか、将来の ことまで 考えられて
いたならなあ、と 思いました。

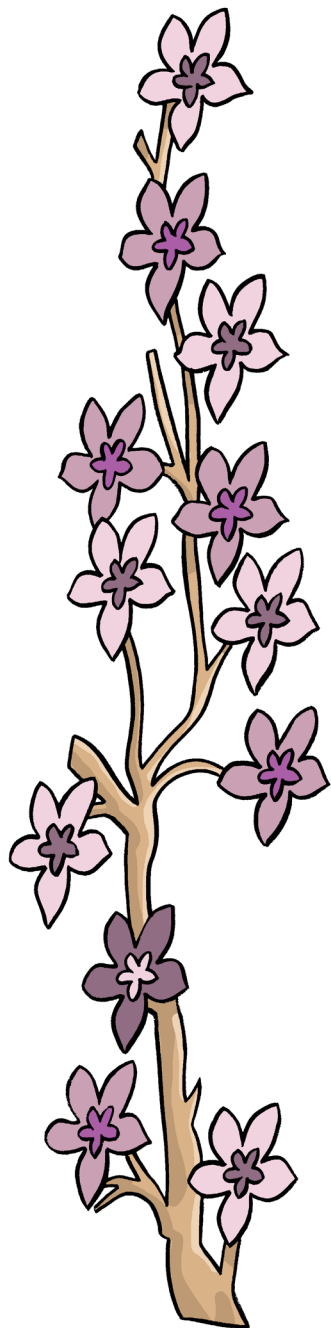
お父さんは 友一のかたに うでを 回しました。二人は、家の 前に
かけられた ちょうちんの 明かりに 照らし出された、まっすぐに
並んでいる トマトや ナスや ほうれん草や にんじんや ジャガイモや
カボチャの 列を、じっと 見つめていました。

「わしらが 気分の 向くことだけを するのは、一時の 楽しみの ことしか 頭には ないからじゃ。だが、
そういった ことは ふつう、暗くなって しまったら おしまいじゃ。

わしも、つかれて 魚を 取る あみを 下ろす 気が せん こともあるが、おまえや 母さんの ことを
考えると、喜んで そう したく なるんじゃ。それで 家族が ちゃんと 世話され、おまえも 幸せに
なれると 知っとるからね。」

翌朝、昨夜の お父さんとの 会話で 決心の ついた 友一は、さっと 下駄を はくと、いそいそと 畑に
出て 行きました。





「今日は、おまえさん達の 周りに 生えとる 悪い 雑草を、一つ残らず ぬいて やるからな。」 友一はナスに話しかけました。畑仕事を する 喜びが もどってきたのです。ナスは、ただの ナスではなく、これらの 野菜全部が、1 年中 おいしい 食べ物を 食べることが できるという、大切な 意味を 持っていました。

「おい、友一。」 聞きなれた 声が します。「また 遊びに 来たよ！」

「悪いんだけど・・・」と 友一。「今日は、午後まで 遊ばないんだ。まず、畑の 雑草を 始末せんと いけないからね。」 友一は 愛想よく、しかし きっぱりと 言いました。

拓は、友一の まじめそうな 話し方に びっくり。一体 どうなっちゃったんだろうと、頭を かしげていました。そして、そこに 腰を 下ろすと、聞きました。

「1 日中 遊んでいたいのに・・・かい？」

「そうだねえ、もし わしが 野菜の 世話を しなかったら どうなるかを 考えてみるとね、やっぱり、今は 野菜の 世話を して、遊ぶのは その後じゃ。」

「それじゃ、ちっとも 面白く ないじゃ ないか！」 拓は むっつりした 顔で 言いました。

「そのことなんだけどね。」 友一が ほほえみながら 言いました。「おまえに 言われて よく 考えてみたら、やっぱり 畑仕事は 楽しいわ。ナスが 大きくなって うれるとね、丸々と 太って ピカピカの 紫色に なるんだよ。すると、母さんが ナスを 焼いてくれる。ものすごく うまいんだ！ 母さんも 喜んでくれるし、父さんも 誇りに おも 思ってくれる。わしも それが うれしいんだ。

おまえは 大きく なったら、お父上みたいに お侍さんになりたいのかい？」 今度は 友一の ほうが 拓に たずねました。

「分からん。わしは、遊びたい 気分の 時は、遊ぶ。トンボを つかまえたりなんか してな。それから、ただ ねどこに ねっ転がって 何も しないのも、すごく 気持ちいいよ。先の ことなんか、考えないさ。」

「ふう～ん。あんな、それは わしの カボチャみたいな ものさ。もし わしが ちゃんと 世話しないなら、カボチャは 虫に 食われたりする。カボチャが じょうぶで 大きくなるためには、わしが 自分の 役割を 果たさないと いけないんだ。わしは、大きく なったら、今 ここに あるだけじゃ なくて、もっと たくさんの 野菜を 育てたい。だから、今 できることを して 学ばんと いけないんだ。大きく なったら、いい お百姓に なるようにね。」



ちょっと^{かんが}考えた末、拓^{すえ}が おずおずと たずね
ました。「わしも^{ちちうえ} 父上のように りっぱな^{さむらい} 侍
なれると^{おも} 思うか？」

「ああ、^{おも} 思うよ。おまえは^{ぼくと} 木刀さばきが
じょうず^{じょうず} 上手だしね。だが、修行は^{しゅぎょう} 必要^{ひつよう} だろう？」

拓は^{たく} 得意^{とくい}そうに むねを^は 張りました。それから、
ため息^{いき}をついて^い 言いました。「だが、わしは
何を^{なに} したら いいんだろう？」

「遊び^{あそ}ほうけてばかりは おられんだろう。だが、
こつこつと^{こつこつ} がんばりゃあ、いつかは りっぱな
お侍^{さむらい}さんになれる。わしが^{はたけ} 畑を きちんと 世話^{せわ}して
いれば、将来^{しょうらい} りっぱな お百姓^{ひゃくしょう} になって、たくさんの
野菜^{やさい}を^{そだ} 育てられるように^{おな} なるのと同じ^{おな} にね。」

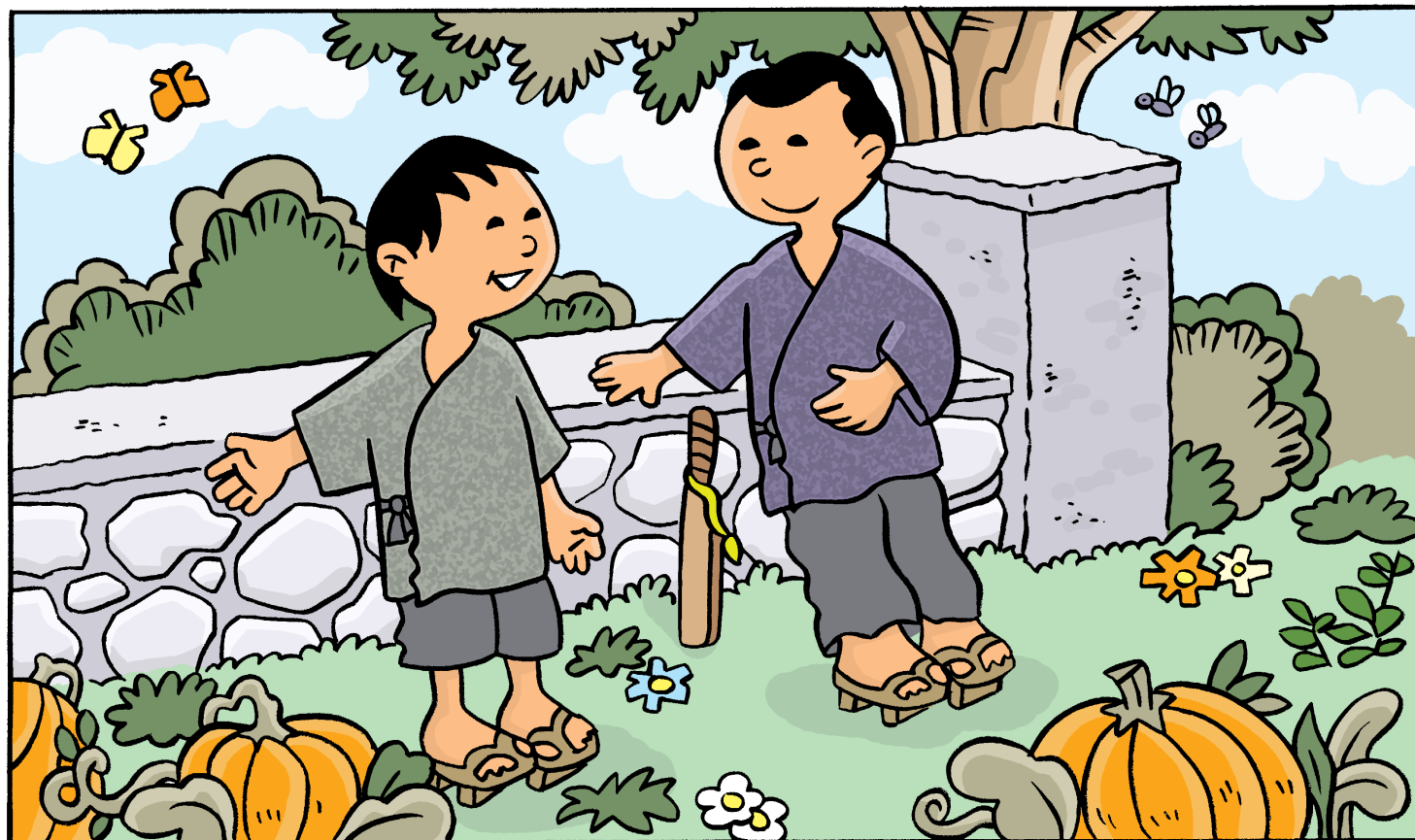
拓は、友一^{ゆういち}が 雑草^{ざっそう}を^{つづ} めき続けるのを^{つづ} じっと
見^みつめていました。「なあ。わ、わしの 木刀^{ぼくと}を、
畑仕事^{はたけしごと}に^{つか} 使^{つか}って^{たく} みたいなか？」 拓が たずねました。

友一^{ゆういち}が^{ことわ} 断ろうとすると、拓^{たく}が すばやく
付け加^つえて^{くわ} 言^いいました。「これを シャベルか
すき^が代^がわりに^が するんだ。いいだろう？」

「そりゃ いいね！ ありがとさん！ わしが
ここ^お 終えたら、遊ぶ^{あそ}か？」

「うん。じゃあ^{あいだ} それまでの 間、わしは^{ちちうえ} 父上の
ところへ^い 行^{さむらい}って、侍^なになるためには^{なに} 何を
まな^{まな} 学^{まな}んだら いいか、聞^きいてくるわ。」

拓^{たく}の 後ろ姿^{うしろ}を見守^みりながら、友一^{ゆういち}は、拓^{たく}が よろいを
着^きて 馬^{うま}に^の 乗^のっている りっぱな^{さむらい} 侍^{さむらい}姿^{さた}を 想像^{そうぞう}しました。
それから、自分^{じぶん}たちの 畑^{はたけ}から 収穫^{しゅうかく}される 数々^{かずかず}の
野菜^{やさい}を^{おも} 思い浮^うかべて、にっこりしました。



はなし よ
お話を 読みながら
できる アクティビティ：
ゆういち はたけ
「友一と畑」
ジオラマ：カラー版、
しろくろばん とりせつ
白黒版、取説



文:T.M. 絵:ディディエ・マーティン
デザイン:ロイ・エバンス
出版:マイ・ワンダー・スタジオ
Copyright © 2020年、ファミリー・インターナショナル
“Yuichi’s Garden”--Japanese
関連の読み物はこちら ⇒ 子供のための物語、
ねばり強さ、責任、自己鍛錬